

## このくにのかたち (下) — 原点からの出発を

山崎農業研究所事務局長 小泉浩郎

この巻頭言の構想を練っていた矢先に巨大地震にあった。報道される惨状、被災者の悲痛な言葉に思考不能となった。わがムラでも鎮守の鳥居が崩落、停電、断水、ガソリン不足そして水道水の汚染まで続いた。副区長、神社総代としてただおろおろ、いま、何が書けるか。筆は止ってしまった。

災難二週間目、すべてを失い絶望のどん底にある被災者は、5割は、ふるさととは復興できると答え、7割は、暮らした地域に戻りたいと語った (3月25日 読売)。生まれ育ち暮らしたふるさとには一人ひとりの物語がある。その物語を家族や地域とともに紡ぎ直そうというのである。

何気なく暮らせていた日常がいかに貴重で大事なものであったか。ふるさとに戻るう」と被災した皆さんは、日常の普通のくらし」を最大の目標とした。だが、その日常への道は遠く厳しい。

火山爆発で世界に類を見ない火山ガスに被災した三宅島は、全島民の避難指示 (2000年9月2日) から4年5カ月で解除、7割の島民が帰郷した。中越地震で孤立した山古志村は、全村民の避難指示 (2004年10月25日) から2年半後に解除、6割が帰郷した。再びふるさとへ」という目標があったから頑張れたし、目標に向けて手をつなぎ合えたから生きる力が出た。

この大災害が、我々に何を問うているか。未曾有の天災、想定外の事故と一過性に終わらせることは許されない。失った多くのいのちと被災による苦悩の数々は、この国

のあり方への警鐘である。地方任せの安全・安心は崩れ、科学は万能ではないこと教え、経済一極集中の成長神話は地に落ち、そして近代文明の脆弱さを露呈した。

この2011年3月17日は、この国の新しいかたちの出発である。それは、強まるグローバル化の中、ヒト・モノ・カネが、国境を越え流動する時代だが、何処へも持ち運びの出来ない風土に刻まれたかけがいのない「ふるさと」の特徴ある風土を活かし、定住し共に生かしあう「共生社会」を展望することであり、混住化、過疎化の中で家庭が孤立し、地域のまとまりが揺らいでいるとき、人々は、つながりの中で自分の存在や役割を自覚し、「ふるさと」を基盤にお互いが支えあう新しい「縁」の創造することであると思う。

こいずみ・こうろう 自治と共生」の視点からムラづくり、地産地消を提案、編著に「自給再考」(山崎農業研究所)

NOSA-2011 vol.63

## ぐにのかたち」(2) 問う大災害

山崎農業研究所事務局長 小泉浩郎

大地震が起こったその時間、アメリカ大使館横のビル6階にいた。宮崎市の野菜専業農家ご夫妻から農業経営の苦労話を聞いていた。地震だ」の声になすすべがなく、ただ机にしがみついた。窓越しの高層ビルが大きく左右に揺れ、ゆっくりと大波に漂う船のようであった。ビルからの非難指令が出た。指定されたホテル オークラ」の駐車場に向った。各ビルからの避難者で道路は立錐の余地もない混雑だが、警察の誘導で歩みは静かに続いた。公共交通機関はすべて止まった。多くは帰宅をあきらめ籠城のためコンビニに走り、食べ物は棚から消えた。

虎ノ門から宿舎のある新宿まで歩いた。歩数計は一万七千歩、一二km、二時間二三分を示す。車は渋滞で全く動かない。歩道は帰宅を急ぐ人々で肩を触れほどである。黙々と新宿駅を目指すが、その先の足がない。新宿駅は帰れない人々であふれ寒い夜を明かした人も多い。

東京で5日間の足止め、六日目に茨城県笠間市の自宅に戻った。電車やバスを乗り継ぎ通常の三倍近い時間をかけた。連日のテレビの地震・津波の大災害と比べる由もないが、屋根瓦が落ち石塀が倒れ水道管が破れた。停電は三日間、この田舎でも生活を大きく狂わした。飲料水は給水車、トイレは用水路の水である。ガソリン不足も大きな打撃であった。田舎ほど車社会である。集落のただ一つのガソリンスタンド、一九日早朝九時から給油の話が流れた。三男の嫁の実家がいわき市、両親の一時避難のた

めに往復のガソリンが必要、前夜の9時からスタンドの前に並んだ。一台20リットル限定であるから満タンには2〜3箇所探し回らなければならぬ。生活に小康を得た頃、市内に4つある上水道浄化槽の1つから乳幼児摂取の基準値以上の放射性ヨウ素が検出された。0歳児に限り飲料水配給との連絡、我が家の二歳と二歳の孫はどうするか。まもなくコンビニからも自販機からも単純水は消えた。続いて酪農家の生乳の出荷制限である。野菜の出荷制限、摂取制限も無用の混乱を起した。

地震、津波、原発と有史以来の難事である。水も電気も過度の地方任せでは限界がある。科学の粋の原発もいのちをかけた人力でしか制御できない。科学は万能ではないことも身にしてみた。一極東京が成長すれば地方もよくなるという成長神話も崩れた。経済は暮らしの手段であることも分かった。求められるのは等身大で慎ましく暮らせるぐに」か。

農政と共済 NO1521)

### 「のくにのかたち」 ③ その底力を問う

山崎農業研究所事務局長 小泉浩郎  
国内観測史上の最大マグニチュード9.0は、津波、原発と複合的な大災害をもたらした。この惨状は、瞬く間に世界各地に報道され、冷静さを失わない日本人の姿に驚きと賞賛が届けられた。

大震災特別講義「私たちはどう生きるべきか」。学生達「アメリカ・中国・日本」を中心にハーバード大学マイケル・サンデル教授によるネットを使った討論があったNHK、4月17日。ハーバード大学の女子学生は「今回の震災のように、人間性が問われる局面での日本人の素晴らしい対応を知り、同じ人間として誇りに思うことができた」とし、作家の石田衣良さんが「こういう災害が起きるとそれぞれの国の地(ぞ)の部分」が表に出る。日本では全く当たり前」と語った。日本では「当たり前」のことが、同じ人間として誇りに思う」と国を越えた共感を呼んだ。さらに「国の部分」が世界共有の価値観と評価された。

まだ5年しかたっていないが、安部元首相「美しい国へ」(文春新書)、藤原正彦「国家の品格」がベストセラーになった。前者は、自信と誇りをもてる日本となるため新しいナショナリズムの構築が重要とし、後者は日本人が見失った情緒の文化、自然への感受性、武士道精神を取り戻すことが国家の品格だといった。だがこの大震災でナショナリズムも武士道精神も全く語られず、この国の品格はもっと身近なところにあった。

「国の地の部分」は、生まれ育ち自然と

ともにある人間の存在そのものであった。定住し、暮らしを立て、歴史を刻み、文化を継承してきた日常の営みがそれであり、森羅万象の神を畏敬し、他「自然を含めて」の共生と循環を基本として生き方である。その具体的な仕組みが集落、町内会など「できることは自分達で」という住民自治組織である。この平時の地道な活動がこの国の地の部分「底力」を養い育ててきた。

サンデル教授は「家族や地域とのつながり、我々を束ねているより小さなコミュニティ、独自のアイデンティティは、私たちが、共に生き、お互いを思いやるうえで重要な要素である。だが、それが地球の反対側にいたとしても強い共感を覚え、自分のことのように誇りに思うことができる。それはより拡大したコミュニティ意識に向けた始まりなのかもしれない。」と結んだ。罹災1ヶ月以上を過ぎ復興の青写真が提案されてきた。この国の底力を評価し、「このくにのかたち」の基本としたい。

農政と共済(NOI529)

## 「のくにのかたち」④―地産地消

山崎農業研究所事務局長 小泉浩郎

未曾有の大災害から100日近く経つが一向に先が見えない。震災当初、秩序ある行動が世界の賞賛の的となった。それは天災に対する「あきらめ」だが、同時に共に助け合う新たな出発へのリセットでもあった。そのリセットし再出発する現場は、二つの「大災」によって、問題はますます深刻になっていく。暮らしのすべてを容赦なく奪い取った原発事故という「大災」そして経済効率至上主義の企業と赤絨毯の政局次元の「大災」である。末端自治体は、直面する困難に戦いながら、法律待ち、計画待ち、予算待ちで展望ある動きが取れないままにあると聞く。

この難事を肌身に感じ共に悲しみ苦しんでいる現場は、座して救援を待つ前に、自らの知恵と行動力で立ち上がっている。きのこの家庭、きのこのふるさとへの回帰を望み「顔が見え話ができる」関係から、それぞれの力を出し合い「地産」共に結び合う「地消」活動をしている。

①石巻日日新聞社は、印刷不能に中、翌日から手書きの新聞を避難所などに張り出した。それが米のニュース総合博物館の永久保存となった。②避難所になっている気仙沼小学校では、子どもたちが毎日壁新聞「ファイトしんぶん」を発行している。③ボランティア活動の大々的な報道の裏方に内部ボランティア（地域自治）の日頃の地道な実績が大きな役割を發揮した。集落・町内会役員、消防団員、民生委員、社教活動等である。④岩手県住田町は、町費3億円を投じて独自規格の木造仮設住宅を地元製

材業、気仙大工等で5月末までに93戸を達成した。⑤気仙沼市小鯖地区は、避難所運営に自治会が立ち上がりコメや野菜を持ち寄り、炊き出しを担った。⑥地産地消の代表である直売所は、被災地に送ろう、被災地産品を食べよう」と直売所間ネットワークを活かした活動を展開している。⑦「いのちを守る300キロの森づくり」（宮脇昭）は、津波被害地の踏査を踏まえ、ガレキを資源に土地本来の森による防潮林を提案している。⑧先人の訓「此処より下に家を建てるな」。巨大な波が濁流となり、石碑の約50メートル手前で止まった「宮城県姉吉地区」。

菅首相はG8サミット（2011/5）で自然エネルギーの割合を2020年代の早い時期に20%超にすると演説した。脱原発には言及できなかったが、この大災害の教訓は、脱原発を世界に宣言し、地産地消による自然再生エネルギー立国をこのくにの私たちとすることであろう。

### 農政と共済 NO1537)